行動する女たちの会

女性差別20年の戦い刊行

一九七〇年代から約二十年間、日本社会のあらゆる女性差別と戦った「行動する女たちの会」の活動をまとめた資料集の刊行が始まった。まだ性差別への意識が希薄だった時代、女性運動史に明確な足跡を残している。

（沢田千秋）

会の前身は「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」。国際婦人年とは、国連が女性の地位向上を目指し、加盟国に行動を呼び掛けた七五年からの十年間。七五年、市川房枝参院議員（当時、故人）らが民間の機運を盛り上げようと会を結成した。八六年、婦人年の終了とともに「行動する女たちの会」に名称変更。九六年、新会員の減少や資金不足から解散するまで続いた。

男女平等運動家の中嶋里美さん（七六）＝埼玉県所沢市＝は、高校の英語教師として教育現場の性差別に疑問を抱き、発起人の一人に名を連ねた。市川さんらと一緒に走り回った日々を昨日のことのように覚えている。「当時のNHKニュース番組では、女性アナウンサーの役割が、相づちを打つか天気予報を読むぐらい。七五年九月、市川さんたちとNHK会長や労組に対し、男女平等にするべきだと抗議した。局側は『ニュースには相当な知識がいりますからねえ』と、のらりくらりだった」

NHKに抗議 ラーメンCMに

NHKへの抗議から一週間後には、インスタントラーメンのCMのキャッチフレーズ「私作る人、僕食べる人」に異議を唱えた。CMは翌月から差し替わった。すると週刊誌などからバッシングを浴びる。「ヒステリックだ」「本質から外れている」。中嶋さんは「ひどい書かれ方だった

「行動する女たちの会　資料集成」を手に、会の活動を振り返る（左から）高木澄子さん、中嶋里美さん、山口智美さん＝10日、東京都千代田区で

が、性別による役割分業の根源的な問題を初めて提起した」と振り返る。

会の発足直後から参加した高木澄子さん（七一）＝杉並区＝は国家公務員だった。「職員の賃金表を見ると、男性は給与がどんどん上がるのに女性は横ばい。組合で『おかしい』と訴えても、仲間であるはずの組合執行部の男性に止められ、苦しかった」。高木さんらは七八年、日本鉄鋼連盟を相手取り、男女の賃金差別改善などを求めて提訴。一審・東京地裁判決の「男女別コース制は憲法違反」が確定している。

会では、「男女雇用平等法案」を独自に作成し、「男女とも仕事も家庭も担える労働条件が必要」などと主張した。しかし、八五年、「男女雇用機会均等法」と「労働者派遣法」が成立した。高木さんは「平等法では男女両方の人間らしい働き方を訴えたのに、均等法は男性が課せられていた重労働を女性にもさせるという不幸な内容になった」と批判する。

資料集「行動する女たちの会　資料集成」には、抗議文やアンケート回答、ビラなどが収められている。六花出版から全八巻が三回に分けて配本され、一、二巻は十一日に刊行。残りは三巻ずつ二回に分けて配本予定。価格は全巻で十八万円。十一日には出版記念会を都内で開く。

今の労働状況 考える契機に

編さんに携わった米モンタナ州立大准教授の山口智美さん（四七）は「現状を打破するヒントがこの資料集成にある」と強調する。

「バブル世代の私は、均等法と派遣法の以前に、人間らしい労働を求める運動があったことを知らなかった。今、男女ともに労働をめぐる状況は悪化し、派遣労働者の増加で組合活動も弱体化している。何がいけなかったのか、なぜうまくいかなくなったのかを考えるきっかけにしてほしい」

ニュースの追跡